

両価的な感情表出に対する印象評価の検討

A Study on the Perception of Ambivalent Expressions of Emotion

藤澤隆史^{1) #}、石盛真徳²⁾、長田典子¹⁾

Takashi X. FUJISAWA, Masanori ISHIMORI, Noriko NAGATA

E-mail : fujisawa@nagasaki-u.ac.jp

和文要旨

本研究では、両価的な感情の表出とその知覚判断の関連性について検討を行った。実験1では、感情価の異なる2つの基本表情図形から、各パーツの組み合わせによって、両価的であると考えられる4種類の両価表情図形を作成し、その感情表現の程度について評価を行った。その結果、「うれしさ」の評価では、両価的な表情図形は、快-不快を示す2つの基本表情の間位置し、快と不快の中間的性質であることが示され、また「疑問」の評価では、左右の非対称性が疑問の表出と関連が深いことが明らかとなった。次に実験2では、顔以外の感情表現メディアとしてサウンドを取り上げ、実験1で用いた顔図形とサウンドによる感情表現の合致(マッチング)の程度について検討を行った。本実験では、サウンドにおける感情表出の要素として和音を取り上げた。その結果、長三和音は「うれしさ」を示す表情図形、増三和音は「疑問」を示す表情図形と関連していることが明らかとなり、また短三和音は不快や「悲しみ」を示す表情図形と、減三和音は不快や「疑問」を示す表情図形と関連することが示唆された。

キーワード : 感情表出、感情価、両価的、非対称、サウンド

Keywords : Emotional expression, Valence, Ambivalent, Asymmetry, Sound

1. はじめに

顔がもつノンバーバル情報において、感情表出とその知覚における法則性については、最もよく研究されているものの1つとして挙げられる。しかしながら、先行研究の大部分では、いわゆる基本6感情(驚き、恐怖、嫌悪、怒り、喜び、悲しみ)をはじめとして、単一の感情についての表出-知覚ルールに焦点を当てる傾向にあり、例えば「苦笑い」のように、二つ以上の感情が複合した表出-知覚ルールについての知見は、未だ十分であるとは言いがたい。

感情の表出過程において、目や口、眉など顔の各部位に関与する筋肉は、ある程度、独立して機能していることが明らかにされており[1]、また、顔の左側と右側は、それぞれ異なる大脳半球の神経支配を受けていることも明らかにされている[2]。したがって複合的な感情が生じた場合

には、その構成要素となっている基本感情がそれぞれ顔の各部位に分散された形で表出されると推測することができる[3]。例えば、目や眉では否定的感情を表出しているが、口元では微笑むような苦笑いや[4]、顔の左側では怒りを表出しているが、右側では平静を保とうとしているような引き攣った怒りなどが挙げられる。

本研究では、ポジティブな感情(例えば、快、喜び、幸福感)とネガティブな感情(不快、悲しみ、怒り)が同時に表出されるような場合、言い換えれば、感情次元上において感情価(valence)の相反する二つの感情が複合して両価的(アンビバレント)に表出されている場合において、知覚者はどのような印象をともなって評価するのかについて検討を行う。数多く存在するであろう複合的な感情表出のうち、本研究において両価的な感情表出のケースに限定した理由は、感情の複合数が

¹⁾ 関西学院大学 理工学研究科、Graduate School of Science and Technology, Kwansei Gakuin University

²⁾ 京都光華女子大学人間科学部、Faculty of Human Sciences, Kyoto Koka Women's University

[#] 現在、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科、Graduate School of Biomedical Science, Nagasaki University